

実践事例三(平成二十年度)

一 題材名 「漢詩を創ろう」

一 文字の世界を広げて

(第三学年)

二 題材観

(一) 漢詩のおもしろさ

千年以上もの長い間、わたしたち日本人は、漢詩を味わうとともに、多くの人が自分の手で漢詩を創ってきた。わたしは日本人が、外国である中国の詩を味わったり創ったりすることができるとは、漢字を日常的に使っているからでしょう。漢詩は漢字だけで創られています。漢字だからこそ、わたしたちは、そこに込められた作者の思いがわかったり、その当時のことを思い描くことができたりと、心から漢詩を楽しむことができると言ってもいいでしょう。

春暁 孟浩然

春眠 不 覚 暁 春眠暁を覚えず

処 処 聞 啼 鳥 処処啼鳥を聞く

夜 来 風 雨 声 夜来風雨の声

花 落 知 多 少 花落つること知る多少

これは、孟浩然の「春暁」という漢詩です。多くの教科書にも載っている漢詩で、以前わたしの学級にいた中国出身の子どもによると、中国でも小学校の低学年で習う漢詩であるとのことでした。この漢詩が日本でも中国でも、漢詩を学んでいく上で、初めに会おう作品として扱われているということなのでしょう。

この漢詩の起句は、「長い冬が過ぎ、暖かい春がやって来ました。苦しいときを過ぎて春を迎え、気持ちもすがすがしさに包まれて眠っている」と、いつ夜が明けたのかもわからないほどです」という意味です。あまりにも有名なこの起句は、日本でも春を迎えたときの句としてよく使われています。春の気持ちのよさを、端的に表現した名句と言ってもいいのでしょうか。

承句は、「暖かい日差しに、鳥たちもうれしそうにあちらこちらでさえずっています」という意味です。処処とは、あちらこちらという意味で、起句に続いて、実際の情景を表現しています。周りのどこにも、春が来たという雰囲気を出しています。作者はまだ床の中で、家の外からは鳥の鳴き声が聞こえるので、外は晴れているのだなあと、眠い状態のまま思っていたところを見事にあらわしています。

転句は、「ああそうか、昨日の夜は、雨風が強かったなあ」と、「転じて、昨夜の回想をしています。今は、こんなに晴れているのに昨夜はかなりの荒天だったようです。そのような回想をすることで、暗さを出し、現在の情景との対比がなされるようにしています。

結句では、「昨夜の風雨のせいで、どれだけの花が落ちたことだろうか」と詠み、どれほど落ちたか分からないと表現するところに、さぞたくさん落ちたのだらうなあ、と想像している作者の姿がみえてきます。暗いイメージの転句のあと、明るいイメージを展開させるこの結句は、結びの言葉として、見事に詩全体を集約しているように感じられます。

この詩のような五言絶句の場合、たった四行二十文字の中に、これだけ多くの内容が詠み込まれているのです。そこには、漢字一文字にそれぞれ意味があるということが、理由として挙げられることでしょう。そして、作者がそれを組み合わせて使ったとき、そこに新たな意味が生まれてくることもあります。このように、漢詩は、漢字一文字に込められた思いが味わえるものだと言えます。

さらに、漢詩は、これだけ短い形式の中に、起承転結の構成がなされています。この詩の場合、起句や承句が春のよさを端的にあらわし、転句が詩全体に変化をつけています。そして、結句では、詩全体をまとめていることなど、構成そのものにも味わいがあると考えられます。このように、使われている漢字や構成にこだわって漢詩を読み、その世界を味わい、さらに自ら漢詩を創ることができたら、それは、どんなにおもしろいことでしょう。そこで、本題材では、漢詩を創り、漢詩の世界を味わう活動を、子ども

たちとともに展開していきたいと思います。

(三) 漢詩を創るということ

詩や短歌、俳句を創った経験がある人は多くいることでしょう。しかし、漢詩を創ろうと思ったことがある人は、あまりいないのではないのでしょうか。それは、多くの人が、漢詩をあまり身近なものだと感じてはいないということ、そして、漢詩を創ることは難しいと感じていることが挙げられると思います。本当に漢詩を創ることは難しいのでしょうか。そう思っ、わたしは、まず漢詩を創ることから始めてみました。

漢詩は、もともとは中国の古典詩です。ですから漢詩は、漢文の文法など、その決まりに従って創っていくことになります。

紫煙

躁 焦 忘 省 己 躁焦として己を省みることを忘れ

忙 碌 嘆 時 遷 忙碌 時の遷るを嘆く

燻 紫 耽 春 爽 紫を燻ゆらせ 春爽に耽る

唯 知 心 不 燃 唯だ心の燃えざるを知る

(下平声「一先」の押韻)

(解説)

気持ちが落ち着かず、自分のことを考えたり、振り返ったりするようなこともできず、忙しさのあまり、世の中の流れについていけないことを、どうしたらいいのだろうかと嘆いている庭に出て、春の爽やかな風の中でたばこをくゆらせ、ゆっくりとした時を過ごす。そうすると、自分の心があつくなくなっていいだけだということに気づかされ、すべては自分にあることを悟った。

これは、初めて創った漢詩(五言絶句)です。漢詩を創るにあたっては、平仄を整えること、押韻をすること、起承転結の構成など、いくつかの決まりがあります。それらについて、五言絶句の場合を例にして図にあらわすと、次のようになります。

| | | | | |
|----|------|------|------|---------------|
| 起句 | は平字、 | は仄字、 | は韻字、 | は平・仄どすばらでもよい字 |
| 承句 | | | | |
| 転句 | | または | | |
| 結句 | | | | |

この二つの形式は、起句の二文字目が平声であるのか、仄声であるのかという違いから決まっています。平仄については、きちんとした決まりがあります。それは、俳句には季語を入れると決まっていることのように、漢詩の長い歴史の中で整えられてきたことです。その決まりには、例えば、「二四不同」といって、二字目と四字目の平仄を逆にすること、転句は粘法(二字目と四字目の平仄を前の句と同じにすること)、結句は平仄を前の句と逆にすること、転句は粘法(二字目と四字目の平仄を前の句と同じにすること)、結句は反法にすることということがあります。これらの決まりは、その漢詩を声に出して読んだときの音の響き方や、そのリズムなどに関係しているのです。

平仄とは、漢字の発声の仕方の違いのこと、漢和辞典で調べることができます。左下に印がある場合

東

は平声で、その他の場所に印がある場合は仄声です。中に書かれている文字は、「韻目」といって、漢字の発音グループをあらわしています。グループは百六あり、平声が三十、仄声が七十六あります。国字以外は、すべての漢字がどこかの韻目に属することになります。

また、押韻についても決まりがあります。その決まりは、次の通りです。

- ・平声三十グループの中の、同じ韻目に属する字でそろえる
- ・同じ字は使えない

これらの決まりに沿って創って見たのが、前掲の漢詩です。創ってみると、それを誰かに見てもらいたくなり、また、評価してほしいくなりました。そこで、この漢詩を「桐山堂」という漢詩創作のサイトに投稿したところ、主宰の方から、次のような言葉をいただきました。

いただいたお手紙に、「中学校の教師をしております。子どもたちでも漢詩が創れないかといういろ探していて、このページを見つけました。このページを見て、どんな形でもまず創ってみることが大切なのではないかと思い、ちよつと創ってみました。」とお書きになっています。

まずは「垂範」ということなのですが、平仄、押韻、起承転結などの形式もきちんと整って、とても「ちよつと創って」とは思えない、仕上がった作品ですね。

気になる点を少し書かせていただきますと、まず起句ですが、「躁焦」は「焦躁」を平仄を合わせるために入れ替えたのかと思いますが、順序が逆になった時に一般に使われない熟語ですと意味が分からなくなります。

転句の「紫」は「紫煙」で、「たばこの煙」をイメージされているのですが、これは和語（和習）です。漢文では「紫煙」と言つと「春の野山にたちこめる靄」をあらわしますので、なかなか通じないでしょうね。

「たばこ」がどこでどうしても必要かどうか、そうして検討すると、言葉の選択も自然に行われると思います。ただ、この詩の場合、題名が「紫煙」ですので、詩の主題が「たばこ」ということでしょうかから外すのは難しいかもしれませんね。

2008. 3. 6

by 桐山人

まだまだうまく創ることができたとは言い難いのですが、このように、平仄、押韻など、最低限の決まりに従って考えていけば、誰にでも漢詩を創ることができると思います。そして、創った漢詩を互いに鑑賞し合うことができましたら、それはとてもおもしろい活動になるのではないのでしょうか。

この漢詩についても、見ていただき、評価していただいたことにより、「こつという意図でこの漢字を使っている」であるとか、「こんな思いを込めて創った」など、もっとこの漢詩について説明したり、話し合ったりしたくなっています。そして、さらに新たな創作意欲がわいてきて、漢詩をいくつか創るようになりましした。

(三) 漢詩を創るおもしろさ

自分の思ったことや感じたことを、いつまでも残しておきたいと思うことは、人として自然なことでしょう。しかし、悲しいことにわたしたちは、その感動を形にして残しておかなければ、記憶は次第に薄れていきます。ですから、それをある形にして残しておくことは、日常でも行われていることです。日記や作文もそれにあたります。また、詩や短歌、俳句にして残しておく方法もあります。今回は、その方法のひとつとして、漢詩にして残すという方法を考えていきたいと思ひます。

自分の思いをあらわす漢字や表現を考えること

漢詩は、漢字だけで創られるものです。ですから、どんな漢字を使うのかということが大切になってきます。自分の思いを的確にあらわすことのできる漢字を選び、それをどのように使っていくのか、ということを考えていく活動を行っていきます。例えば、「かなしむ」ということを漢字であらわそうと思ひます。漢和辞典の同訓異義語のページには「哀」「悲」「慘」「恨」が書かれています。「哀」は「ふびんに思つ、いたわしく感じる」、「悲」は「哀よりは強い、声をあげていたむ」、「慘」は「むじやくつひやく思つ、」

「恨」は「心中にもの悲しく感じる」と、それぞれの「かなしむ」の意味の違いが書かれています。自分の気持ち的的確にあらわす漢字が、どの漢字であるのか、そのときの状況や立場などを思い浮かべながら考えていくのです。もちろん、この同訓異義語のページだけでは判断ができないこともあります。そのときは、漢和辞典のそれぞれの漢字が書かれているページを読んで考えていきます。自分の感情や動作などを、最も的確にあらわしている漢字は何であるのかということを考えていくのは、その漢字について自分もっている意味や使い方の範囲を広げていくことにもつながっていきます。

また、「かなしむ」ということを、「哀」「悲」「惨」「」のような漢字を意図的に使わないであらわしてもおもしろいのかも知れません。例えば、「離群一鳥（群れからはぐれた一羽の鳥）」とあらわしてみたり、「沈西夕日（西に沈む夕日）」とあらわしてみたりしてもいいと思います。もしかすると、直接あらわすより、もっと複雑で深い思いを伝えられるのかも知れません。思いを景色であらわしたり、具体的なもので置き換えたりと、その表現のしかたは無限に広がっていくことでしょ。

起承転結の構成を考えること

漢詩の特徴の一つとして、起承転結の構成が整っているということがあります。「二六二」「桐山堂」に投稿されていた漢詩をひとつ紹介します。身近なできごとを題材にして、自由に楽しく創られていることがうかがえる作品です。

賛美二六一

二六二を賛美す

| | |
|---------------|----------------|
| 球界 一郎 於 美 州 | 球界のイチロー 美州に於いて |
| 待 望 快 拳 散 千 憂 | 待望の快拳 千憂を散ず |
| 研 鑽 勉 励 人 知 否 | 研鑽 勉励 人知るや否や |
| 無 上 栄 光 誰 可 求 | 無上の栄光 誰か求むべけんや |

(下平声「十一尤」の押韻)

この漢詩では、起句と承句で、イチローのメジャーリーグで達成した快拳が、わたしたち日本人の不安や心配を吹き飛ばし、誰もがすがすがしい気持ちになったことを詠んでいます。そして転句では、イチローがこの記録を達成するにあたって、並々ならぬ努力をしたであろうことを思い起こしています。読んでいるわたしたちも、達成した快拳のような事実だけではなく、そこに隠されたイチローの努力する姿を想像するようになります。そして、その姿を想像することによって、結句では、このイチローの快拳が「無上の栄光」であるということ、この漢詩を読んでいる誰もが感じられるようになっていきます。このように、起承転結の構成がうまく整っていることによって、主題であるイチローの快拳を、より深く味わえるようになっていきます。

漢詩は、文章のように多くを語らず、的確な言葉で簡潔にまとめられています。また、漢字一文字一文字の意味があることから、そこに多くの世界を込めることができるということもあります。このように、短い表現の中でも、起承転結があり、そこにどんなことを詠み込んでいくのかということを考えていくことは、漢詩を創ることのおもしろさのひとつであるとも言ってもいいと思います。

また、この漢詩から、漢詩を創ることをかたく考えなくてもいいということも感じられるのではないのでしょうか。自分の思いにあった漢字を見つけ、それを起承転結の構成の漢詩という形にすることができたとき、今まで以上に漢詩を深く味わうことができるようになるのではないのでしょうか。そして、漢詩を創るといことは、自分の思いを表現するひとつの新たな方法を手に入れることになると思います。

参考文献：『漢詩はじめの一步』鈴木淳次 リヨン社

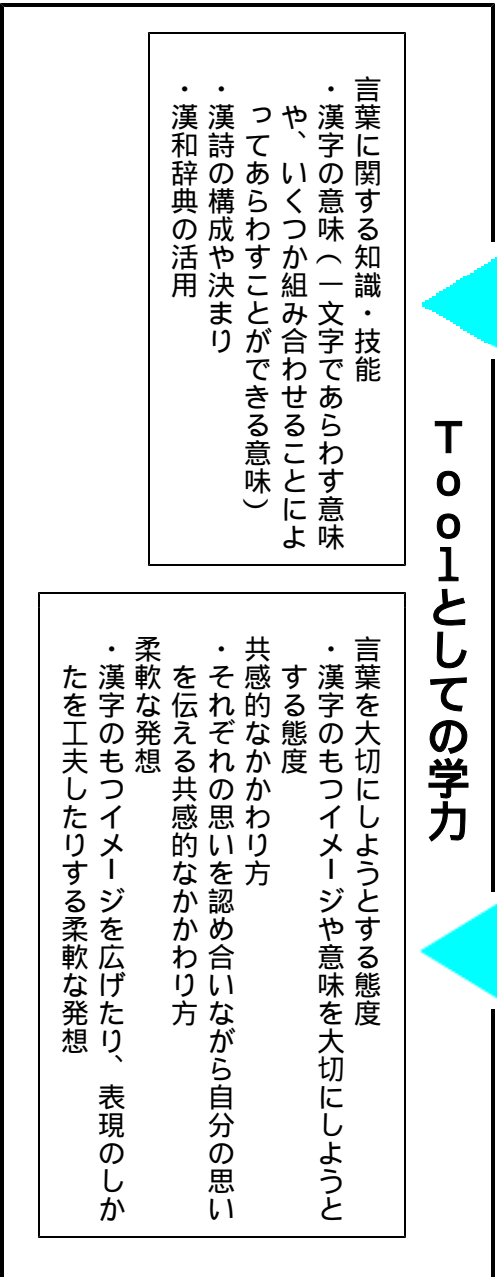
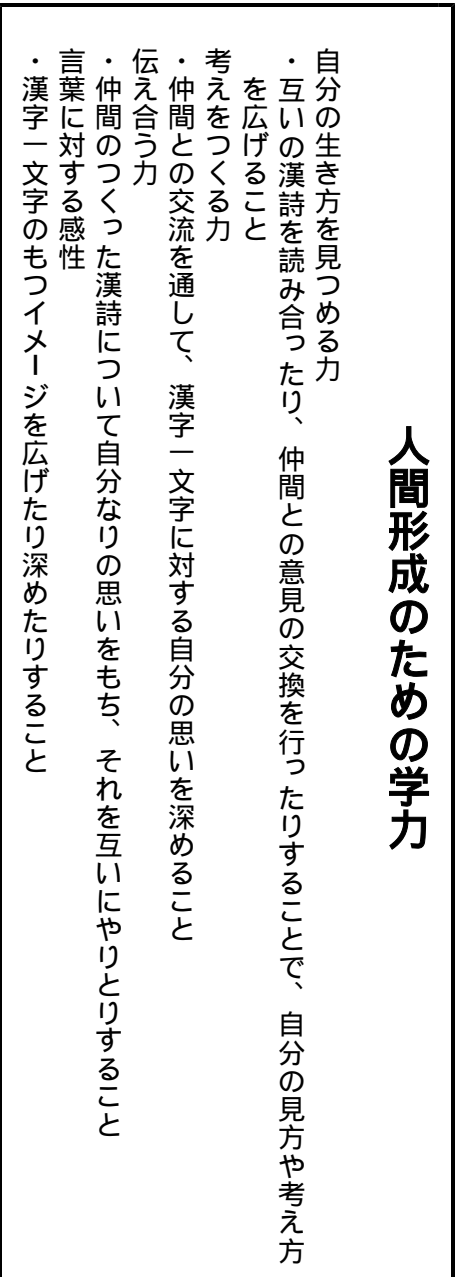
『漢詩を作る』石川忠久 大修館書店

参考資料：「桐山堂 漢詩総合サイト」<http://tosando.pt.u.jp/>

- 三 題材構成
- (一) 思いをもつ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(十二時間扱い)
- ・さまざまな漢詩にふれ、その世界を味わう
- ・三時間
- (二) 問いをつくる・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
- ・漢詩にどのような世界を込めるのかを考える
- ・二時間
- (三) 考えを明らかにする・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
- ・漢詩の形式で自分の思いをあらわす
- ・三時間
- (四) 見方・考え方を広げる・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
- ・仲間の創った漢詩を読み合う
- ・(本時はその二)
- ・三時間
- (五) 価値観を形成する・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
- ・自分の思いを漢詩の形にしてあらわす

四 題材における学力構造図

人間形成のための学力



新学習指導要領との関連

A 話すこと・聞くこと

・聞き取った内容や表現の仕方を評価して、自分のものの見方や考え方を深めたり、表現に生かしたりすること。

B 書くこと

・書いた文章を互いに読み合い、論理の展開の仕方や表現の仕方などについて評価して自分の表現に役立てるとともに、ものの見方や考え方を深めること。

C 読むこと

- ・文脈の中における語句の効果的な使い方など、表現上の工夫に注意して読むこと。
- 〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕
- ・歴史的背景などに注意して古典を読み、その世界に親しむこと。

五 授業実践

(一) 思いをもつ・・・・・・・・・・・・・・・・三時間

第一時(九月二十六日)は、漢和辞典を全員分準備し、「春暁」「黄鶴楼送孟浩然之廣陵」「贊美二六一」「紫煙」の四つの漢詩を配り、その内容を味わうことから始めました。子どもたちは、その語順や言葉の意味など、慣れないところもありましたが、仲間と協力したり、漢和辞典で調べたりしながら、漢詩に表されている内容を理解しようとしていきました。ある程度調べたあと、全員でその内容を確認していくことにしました。それぞれが内容を把握する時間がかかってしまったので、この日は、「春暁」の内容の確認と、そこに表されている作者の思いや、そのときの状況などを話し合うことで終わりました。

第二時(十月二日)からも、毎時間漢和辞典を人数分準備して、いつでも自由に使えるようにしました。この日は、「黄鶴楼送孟浩然之廣陵」と「贊美二六一」の内容を確認することと、そのときの状況などを味わう活動から始めていきました。子どもたちには、そこに使われている漢字や表現に着目するように促しました。すると、「黄鶴楼送孟浩然之廣陵」から、「孤帆」「碧空尽」「天際流」といった表現に着目する姿が見られました。例えば「孤帆」が「一艘の舟」を表し、さらにそこから「寂しさ」を表しているといったことなどから、詩に表された奥深さを感じていったようです。

また、このあたりから、子どもたちより、語順についての質問が出されるようになりました。そこで、漢文の語順は、英語と同じようになっていいることや、その語順でも読めるようにするために、日本で返り点を作り出し、活用していること、そして、返り点がどのようにつけられているかなどを、子どもたちと確認していきました。今回は、文字数の少ない漢詩を扱っているため、返り点は、レ点と一、二点のみを取り上げました。

さらに、ここでは、漢詩についての知識を広げるために、「漢詩について」という資料を使って、説明していきました。押韻については、現代のラップといわれている楽曲にも多く使われていることから、子どもたちも、そのリズム感の効果について納得していました。そして、起承転結という構成や、二字＋二字＋三字で七字になっていることなど、はじめに配った四編の漢詩を見ながら、確認していきました。このあたりから、子どもたちは、ただ漢字が並んでいるのではなく、そこには作者の思いや工夫が込められていることに気づいていき、漢詩の奥の深さをさらに実感していったようです。

第三時(十月三日)は、漢詩の決まり(押韻のこと、構成のこと)についても一度確認するところから始めました。そして、実は決まりはこれだけではないことを話し、平仄について書かれた資料も配り、説明しました。子どもたちにとって平仄は、やはり難しいようでしたので、特にこだわらなくてもよいことを伝えました。もちろんその理由として、音をそろえることは、漢詩を中国語として音読したときに効果があるものであるから、日本語でその詩の内容を味わっていくという今回の授業では、特にこだわらないうということ伝えました。子どもたちは、納得したようで、自由に創っていくことを考えていきました。

このように漢詩についての知識が増えていくことで、子どもたちは、さらに漢詩の奥の深さを感じ、漢詩に興味をもっていきました。そして、創ってみたいという思いを強くしていったようでした。

ここまでの活動を通して、子どもたちは、「漢字のもつイメージや意味を大切にしようとする態度」というToo1としての学力を強化・深化していったと考えられます。

この時間(第三時)の後半から、漢詩にどんなことを詠み込むのかということを考えていくことにしました。ここでは、体育祭をテーマにすることを伝え、まず、授業者の創った「附中体育祭」という漢詩と、それを投稿し、指導された内容を書いたものを配りました。それは、授業者も同じように思いをもち、そ

れを漢詩に表していること、そして、それを見てもらっていることを伝え、授業者が特別ではなく、みんなと同じように悩みながら創っていることを感じてもらうことによって、漢詩をより身近に感じて、自分でも創ってみたいという思いになってもらいたいからです。ですから、さらに、指導してもらった結果の漢詩を配り、そこでも思いを子どもたちに語りました。そして「附中」という固有名詞は、一般的には通じないので使わない方がいいという指導には、納得できなかったため、もう一度創り直したことも伝え、その漢詩も配りました。授業では、この作り直した漢詩の転句を考えていくということにしました。ここまでのいきさつを説明していくと、子どもたちは、最後に提示したもう一度作り直した漢詩が一番いいと思ったようで、特に異論もなく、どんなことを書き表していこうかと考えていくことになりました。

(二) 問いを創る・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・一時間

第四時(十月七日)は、まずは、授業者が創ったときもそうであったように、漢字を意識しないで、日本語の文を考えていけばいいと伝えました。イメージとしては、授業者が創った漢詩の「解説」のようなものです。しかし、中にはどうしても漢字(今回は七言絶句なので七文字)を意識してしまい、自分の言いたいことがうまくまとめられなくなっている子どももいました。そこで、そういう子どもたちには、全体に話をするだけでなく、追求の記録で助言するようにしました。この時間は、個別に子どもにあたるように心がけ、どのようなところで悩んだり考えたりしているのかをつかむようにしました。すると、「自分の書きたいことがまとまらない」「言いたいことが漢字になるのが不安」といった思いをもっている子どもが多いようでした。予定では、ここを一時間でを行うつもりでしたが、まだ書きたいことがまとまらない子どもも何人かいました。ですから、次回は、全員が漢字を考えるところに入っていくのではなく、どのようなことを詠み込みたいのかを考える子どもと、漢詩の形式にいく子どもと両方いるような形になりました。

(三) 考えを明らかにする・・・・・・・・・・・・・・・・三時間

第五時(十月八日)は、前の時間までに、自分の書きたいことがうまくまとまらない子どもがいたので、「内容をできるだけ具体的にすること」「誰が読んでも内容がわかること」ということを意識して考えるようになげかけました。子どもたちは、きれいな、カッコいい言葉(比喻表現のように、一見しただけでは何を言いたいのかはつきりしないもの)を使いたがる傾向があるようです。そこで、比喩的な表現を使っていた場合、「それはどいう意味なの?」と説明を求めるようにしました。そのときにうまく説明ができなかった子どもは、具体的に書き表すということがどういことなのか、わかっていったようでした。

また、漢詩の形式にいく子どもを意識して、仲間の作品(まだ完成していないが、考え方として良さそうなもの)を紹介しました。その子は、「雨で順延がつづき、テンションが下がり……」という内容を漢字で表すには、どうすればいいか考え始めていました。自分が言いたいことに合った漢字をさがしていたようで、ひとまとまりの表現(この場合、テンションが下がり)を「文字の漢字にしよう」としていました。これを、「滅」や「沈」という漢字で表し、そこから「雨で順延が続き」を「雨」「か」「延」にしようとしていました。このような考え方がいいと思ったので、これを紹介しました。子どもたちは、書き表したい内容を、漢字に置き換えていく活動の一つの方法として、参考にしながら取り組んでいきました。

第六時(十月九日)は、前時と同様に、自分が表現したいことを漢詩にいく活動の続きでした。自分の思いにあった漢字を考えたり、漢和辞典で調べたりしながら活動していました。仲間に見せて意見をもらう子もいましたが、この時間は、授業者のところにもってきて助言を求める子どものほうが多くいました。自分が思うような漢字を見つけるにはどうしたらいいかであるとか、漢字にはしたけれど、それとどのように並べたらよいかという質問が多くありました。語順については英語と同じようなものであるとわかってはいても、いざ詩として表すときに、どのように並べたらいいかわからなくなるようでした。ですから、そういった子どもには、どんなことを言いたいのかを確認しながら、一緒に語順を考えていききました。予定では、二時間でしたが、子どもたちの作品ができるところまでいかなかったため、次回もう一時間取り組むことにしました。

第七時(十月十六日)は、この日で作品の完成を目指すということで、各自取り組みました。ここまでの漢詩を創る活動を通して、子どもたちは、Toolとしての学力の「一文字であらわす意味や、いくつが組み合わさることによってあらわすことができる漢字の意味」「漢詩の構成や決まり」「漢和辞典の活用」といった言語に関する知識・技能を創出していききました。また、Toolとしての学力の「漢字のもつイ

メージを広げたり、表現のしかたを工夫したりする柔軟な発想」を強化・深化していったと考えられます。

(四) 見方・考え方を広げる……………三時間

第八時(十月二十日)は、創った漢詩をよりよいものにしていく活動をしていくことにしました。まず、前時までに創った一人一人の漢詩を印刷して配付しました。一通り目を通したあと、一人一人、「どんなことを詠み込もうと思っただのか」「もっとこうしたいと思っただけのこと」の二点を発表しました。詠み込んだ内容については、解説文もあるもので、それと照らし合わせながら、確認していききました。こうしたいと思っただけのことについては、子どもたちが、それぞれの漢詩を創っていった過程がわからないので、創った本人がどのような思いをもっているのかつかむために行いました。

この発表を受けて、話し合いをしていくことにしました。最初に話題になったのは、○君の漢詩です。それぞれの思いが発表されたとはいえ、まだまだ十分ではないところがあるので、もう一度、○君から漢詩の説明が行われ、そのあと、○君の思いを大切にしながら、よりよくしていこうと話合いが始まりました。○君の作品は、以下の通りです。

号砲ガ 鳴り響キ 騎馬ガ 動キズメ

号砲が鳴り響き騎馬が動き出す

○君からは、「騎馬戦の開始時、静かに、でも緊張感があるような、そしてそこには闘争心が……」という説明がありました。以下はそこで出された子どもたちの意見です。

- ・「鳴響」は「文字」「響」でも意味が同じだから「響」にしたほうがいい
- ・静かな感じ、ゆっくりな感じがなければ、「文字減ったところに」「静」を入れるといい
- ・「静」を入れることによって、号砲のあとの緊張感や静まりが表現できると思う
- ・号砲のあとの静まりが表現されたほうが、そのときの静かな闘争心も表現できるのでは…
- ・「騎馬」は「文字」「馬」でも意味がわかるから「馬」だけでもいい
- ・「動」「文字で」「うごきます」と読ませているが、それだったら「出動」とすればどうか
- ・「始動」としてもいい
- ・「出陣」でもいいのでは
- ・「動」よりも「歩」「や」「走」がいいかもしれない
- ・騎馬戦の勇壮な感じがあまりないので、「暴」「騒」のような言葉を入れてもいいのではないか
- ・開始のときの緊張感や静けさを表現するのであれば、「暴」「や」「騒」は合わない気がする

いろいろな意見が出されましたが、子どもたちは、この作品を創った○君の思いや感じたこと、表現したい内容を意識し、ずれてくると、それを修正していくような意見を出していました。話し合いがとぎれたところで、○君に、どうするか聞いてみました。そこでは、様々な意見が出されたため、まだまだとまっていないとのことでした。ですから、今後、これらの意見を参考に考え直す機会をもつことを伝えました。

この話し合いを通して、子どもたちは、以下のような感想をもったようです。

- ・体育祭について、みんなそれぞれ考えていてすごいなと思いました。詩を考えていくことによって、さらによくなくていくのがおもしろいです(Eさん)
- ・やっぱりおもしろかった。(中略)よくするのも、作った人の想いっていつのを大切にしながらいきたいと思います(Kさん)
- ・一人で考えるよりみんなで考えたほうが、違う意見がたくさん出ておもしろかった。かんじはたくさんあるから、結構変え方があると思った(Sさん)
- ・人の作品を読むということは、客観的に見れるわけだから、自分のもののヒントになると思う(T君)
- ・大場君の漢詩を考えていく上で、作者の思いを第一に考えることが大切だって改めて感じた。漢詩は、その漢字からのイメージと、作者の思いとが上手く合わさってこそ、良いものが作れていくと思う(Wさん)

| 学 習 活 動 例 | 留 意 点 |
|--|---|
| <p>二人の漢詩をよりよいものにしていくためには、どこをどう考えていけばいいのか、それぞれの意見を出し合おう</p> <p>・N君の作品「信 皆 懸 全 企 画 長」 N君自身が、どんなことを表現したかったのか、そして、どこをどう直したのかを、自分の書いた解説とともに説明をする</p> <p>体育祭の企画長として、フレッシャーを感じていたこと、そして、「勝ちたい」とか「楽しくやりたい」というみんなの思いや、自分への期待、それに合わせて、自分の「いい企画にしたい」「みんなを裏切ることはできない」「一位になる」という思いを表したい。</p> <p>このN君の思いに対して、</p> <p>・企画長」という言葉を、他の表現に置き換えたほうがいい、三文字分もとってしまったり、表現を替えれば、もっとたくさんの世界を詠み込むことができる</p> <p>・「フレッシャー」をあらわす言葉を入れるといい、例えば「重圧」とか「圧」だけでも、「重」だけでもいいかもしれない</p> <p>・「自分の思い」をあらわすような言葉を入れたい</p> <p>・「期待」という表現を入れる</p> <p>・Nさんの作品「静 轟 神 風 集 団 愛」 同じように、Nさんが、自分の思いを説明する</p> <p>解説にある「集団愛」とは、「A軍」この学級が所属していた赤色A集団が好きだ」ということや、「A軍でよかった」と思えることを表している、また、私たちのおたけびを「神風」で表し、そこには「優勝したい」「楽しみたい」という思いが込められている</p> <p>このNさんの思いに対して、</p> <p>・「神風」という表現は使いたいのか？</p> <p>・「神風」をほかの表現にした方がいい、「私たちのおたけび」をあらわすような言葉に替えてみたらどうですか</p> <p>・「集団愛」は、さっきの成瀬君と同じで、三文字分だから、「団愛」などにしてもいいのではないが、「愛」だけでもいいのかもしれない</p> <p>・一文字でけつ（つ）あらわすことができると思うから、できるだけ一文字や二文字にした方がいい</p> <p>・もっとも言いたいことはどんなこと？それによって、表現する感じが違ってくるような気がする</p> <p>今回は、二人の作品を取り上げましたが、まだいくつか残っています。自分の作品について触れられていない人が多いのですが、今日の話し合いで、自分の漢詩について、あらためて思ったことがあったと思います。そんなことも含めて、今思っていることを、「追求の記録」に書いておこう</p> | <p>・はじめに、追求の記録から、生徒の感想をいくつか紹介し、この授業を通して、自分の漢詩の参考にもなることを確認する</p> <p>・作者（この場合はN君やNさん）の思いを大切にしながら、自分の考えを述べていくことを期待する</p> <p>・仲間の言ったことに対して自分はどう思うかということを意識してなげかけ、さらに深く考えられるようにしていく</p> <p>・仲間が言ったことを受けて、自分の思うことを言うような姿を期待する</p> <p>・自分の考えなかった考えにふれた場合、それについての思いをもち、発言することを期待する</p> <p>・よりよい漢詩にするための活動を通して、「柔軟な発想」を活用し、人間形成のための学力である「伝え合う力」を培う。</p> <p>（仲間の発言を受けて、作者の思いにあった漢字や表現などを伝えたり、自らこんな内容を詠み込んだ方がいいというような発言をしたりする姿が見られたとき）</p> <p>・「言葉に関する知識」を創出する（作者の思いを大切にしながら、代案となる漢字を挙げる姿が見られたとき）</p> <p>（仲間の発言を受けて、漢字を具体的に挙げるような姿が見られたとき）</p> <p>・「共感的なかわり方」を強化・深化する</p> <p>（それぞれの思いを認めながら自分の思いを発言する姿が見られたとき）</p> <p>・「追求の記録」を書く時間を授業時間内に確保する</p> |

第十時（十月二十七日）は、引き続きそれぞれが創った漢詩についての話し合いを行いました。K君の作品が取り上げられました。K君の作品は、以下の通りです。

練習重思道勝利

練習で重ねた思いは勝利への道となった

K君から、練習のときにみんなの思いが一つになったことを、「重ねた」とあらわしたが、他にいい言葉があったら変えたいということ、「勝利」が結句の「栄光」と似ているので、これもいい表現があれば変えたいということが皆に伝えられ、話し合いを行いました。

このような活動を通して、共感的なかわり方ができるといって「Too」としての学力」が創出されたと考えられます。そして、それを活用することにより、仲間との交流を通して、漢字一文字に対する自分の思いを深めるといった考えをつくる力、仲間のつくった漢詩について自分なりの思いをもち、それを互いにやりとりする伝え合う力といった「人間形成のための学力」を育てていくことができたと思われま

(五) 価値観を形成する・・・三時間

第十一時(十月二十八日)からは、ここまでの話し合いを通して、わかったことや感じたことをもとに、自分の作品をもう一度見直す活動に入りました。見直す中で子どもたちの中に、起承転結すべてを創ってみたいと思いはじめる子が出てきました。そこで、七言絶句を創ってみるという活動をする事になりました。時間がかかる活動だったため、すべての子どもが完成することはできませんでしたが、それぞれ自分の漢詩を創る活動をしていきました。できあがった作品を一部紹介します。

赤組体育祭

SS

徒抱個思立舎丘
導光向勝掲紅矛
混朱響叫成親赤
仲貴一期共喜憂

(下平声十一尤)

徒(ともがら)抱き個の思い、舎の丘に立ち
導きし光、勝ちへと向かい紅の矛を掲げ
朱に混ざり叫びを響かせ親ら(みずから)も赤となる
仲は貴し、一期の喜憂を共にす

真

SA

仲間炎水不同心
天狗躍如猛獸臨
装飾闘燃違表裏
銘肌砕壁縁由深

(下平声十二侵)

仲間炎水心を同じうせず
天狗躍如猛獸臨む
装飾闘燃表裏を違える
銘肌砕壁縁由深まる

集団愛

MY

校燃四色附中光
仲間持誇求最強
皆踊笑顔臨企画
如炎深絆純風望

(下平声七陽)

校燃える四色附中光る
仲間誇りを持ち最強を求め
皆踊る笑顔企画に臨む
炎の如く絆を深める純風たる望み

自分の作品にもう一度立ち返り、漢詩を創っていくことで、自分のものの見方や考え方を広げていくことになったことでしょう。そして、自分の生き方を見つめる力という「人間形成のための学力」を育むことができたのではないかと思われま

子どもたちは、ここまでの活動を通して、漢字の意味を辞書的にとらえるだけでなく、その使い方や組み合わせ方によって、イメージを広げられることに気づいていきました。また、子どもたちは、仲間のものの見方や考え方を

自分で、自分とは違った見方や考え方があるということにも気づいていきました。そして、子どもたち自身のものの見方や考え方に、少なからず影響していると考えられます。このような広げられたイメージや、さまざまなものを見方を意識して漢詩を創っていくことによつて、漢字一文字のもつイメージを広げたり深めたりするといふような人間形成のための学力」を育てていくことができたのではないかと思われま